

# 令和5年度 第9回 豊田市井郷地域会議 会議録

開催日時	令和5年12月13日(水)	開会	閉会
		午後7時00分	午後8時35分
会場	猿投コミュニティセンター2階 大会議室		
出席者	地域会議委員：17人		
	会長：加藤 勝 副会長：永江 榮司		
	委員：稲垣 一志 伊東 由岐雄 岩本 直雄 大上 二三子		
	加藤 俊治 加藤 真郎 近藤 一也 澤田 章 新宮 敏雄 鈴木 幹三 杉浦 基之 鈴木 登喜一 高畑 春香 田中 功 宮地 俊久		
欠席者	3名 ( 後田 澄夫 梶原 虎之介 福岡 信明 )		
オブザーバー	豊田市議会議員：中村竹夫		
傍聴者	0名		
事務局	豊田市 太田市長 企画政策部：辻部長、企画課：野依課長、都市計画課：今村主幹 地域振興部：後藤部長 猿投支所：広瀬支所長、太田副支所長、宮石担当長		
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 豊田市民の誓い(唱和)</li> <li>2. 会長あいさつ</li> <li>3. 「第9次豊田市総合計画」に関する答申について <ul style="list-style-type: none"> <li>・市長あいさつ</li> <li>・答申書の授受</li> <li>・市長との意見交換会</li> </ul> </li> <li>4. 提言に対する市の回答について</li> <li>5. わくわく事業現場訪問について</li> <li>6. 情報共有・事務連絡 <ul style="list-style-type: none"> <li>・令和6年度の地域会議委員継続について</li> </ul> </li> </ol>		

## ■議事(要約)

### 3 「第9次豊田市総合計画」に関する答申

市長あいさつ：

今回「第9次豊田市総合計画(以下「9総」という。)」について諮問させていただいて、本日答申をいただくが、抽象的な内容の諮問だったので、お悩みいただいたことと思います。計画の前段階であり、いきなり計画を作っていいものでもないという思いがあり、このような諮問をさせていただいた。新型コロナウイルス禍で3年半が経ち、それぞれの地域、団体、自治区長が委員に入っているの、感触をお聞きしたいと思っている。コロナでそれぞれの地域がどんな状況になっているのか、ほかの地域でも聴かせ

てもらっている。新しい人が自治区に入らない、また子ども会が細々として消滅しそう、PTAもガタガタしている、高齢者クラブも元気がないなど、コロナ前にも兆候はあったが、これらがさらに加速した気がする。このまま手を付けずに成り行きに任せてしまうと、思考停止になってしまい、打つ手が無い、どうしていいかわからないとなってしまふ。そんな傾向が多かれ少なかれあると思っている。こうした視点を考えると9総でどのように考えればいいのか、今後検討していかなければならないが、今の段階で中途半端で抽象的だが、地ならしの意味で共通認識をしておかないと次の段階に進めにくいと考えている。中村議員がこの井郷地区は非常に元気であると発言されていたが、新しい人が自治区に入ってこないということが他の地域で起こっている。新しい人と旧来の人との軋轢があって、これまでの人は地域に溶け込もうという思いがあったが、今後はどうなるかわからない。人の出入りが激しい井郷地域だからこそ、いろんな意見を聴かせていただけたらと思っている。

#### ■ 答申書の授受

加藤会長から太田市長に答申書を手交

#### ■ 記念撮影

#### ■ 加藤会長から答申書の概要を説明

#### ■ 意見交換

委員：御船は人口が少しずつ増えている。運動公園線の沿線にはまだ土地があるため、企業の進出の話もある。そうすると交通インフラが後追いになっていると感じる。特に北の地域は計画があるが、進んでいかない。具体的には都市計画道路の勘八狭線で土地の買収はしているが、進みが遅い。9総の中でこの整備が着実に前進するようにしてほしい。

地域の活動は、ふれあい祭りなど他の地域に比べて早く再スタートできている。若い人の方が早く戻っているが、高齢者はまだまだ参加が少ないと感じる。これまでと違ってコロナ以降、子ども会に入らない人が出てきた。また自治区に入らない人も出始めてきた。区長になって3年目だが、そういった傾向が出始めている。

市長：道路整備については、「はいそうですか」とはならない状況がある。国や県との関係もあるので、ちょっと時間をいただくことになると思う。後段の話は、自治区に入るメリットは何かと聞かれて、どうお答えしていますか。かつては聞かれることがなかったが、いざ聞かれるとどう答えるのか悩んでいる。地縁型の子ども会もPTAも高齢者クラブも同様の悩みを持っている。ちょっと根が深い。余程、積極的な何かを作り上げていかないと、一人抜け二人抜けと歯止めが効かなくなる。そういう地域社会を我々も望んでいないので、そこを踏み留まる何か手立てを講じないといけないというのが行政側の認識である。お知恵を出していただきながら、何か次の方策を考えるのかなと思う。どの団体も共通した問題意識は役員のなり手がいない、若返らないという問題をコロナ前に抱えていたが、コロナを契機に顕在化した。ここで何か手を打てるのではと思っているが、高齢者の社会参加は深刻かも

しれない。平均寿命が戦後一貫して延びてきたが、ここ2、3年で短くなってきている。男性でコンマ3歳、女性でコンマ5歳くらい、一時的な要因だと思いたい。一時的に下がっている要因はコロナの影響ではないか。もう一つは老衰が増えているという話もある。福祉施設の職員と話をしていると、施設に入所している人は、コロナ前から看取りが増えている。看取りとは延命措置を行わず、ご飯が食べられなくなったら、最後を迎えさせたい。本人の希望なのか、家族なのかわかりませんが、延命措置をしないというのが、平均寿命が短くなっている要因かもしれないという話があった。皆さんの周りでも入院したら家族との面会が出来なくなって、ずっとそのまま家族とも話ができずに亡くなっていく。家族と一緒に生きる気力も続くが、たった一人になって最後誰とも話ができずに、そういう中で最後を迎えるのは、寿命が延びるとか考えられない。実際にはいろいろな要因で変化している。それは亡くなり方の話だが、問題は普通に健康で暮らしている高齢者が人との会話を自粛してしまうという生活が3年半も続いている。今も高齢者の行動が大きく変わっていないとなると、心身へのダメージが大きいと考えられる。入院しなくても心身両方の健康が心配になる。とにかく何とか外出すること、家から一歩外に出ようとすると、必ず身だしなみを整えて出かけるので、生活上のメリハリがつく。家にいると一日中パジャマのままとか、テレビの前に座りっぱなしという生活になるが、外に意図的に連れ出す、出てもらうということをしなないと、地域全体の課題が積み残っていくような気がする。

委員：8月に安田副市長がみえた時にも触れたが、市民の誓いの「スポーツに親しみ教養を高めて、若い力を育て」に焦点を当てて、井郷地区のジュニアスポーツカルチャークラブを昨年立ち上げた。先生たちの働き方改革のためにこどもの指導ができなくなったので、四郷小と井上小で地域の指導者を集めて、火曜、金曜にバスケ、サッカー、ファンファーレを教えている。高橋、土橋、井郷が何とかして子ども達のためにやろうと進めている。指導する方は4時から5時の時間で、働く世代は指導ができない。今やっているのは定年して65歳から75歳くらいの人で、自分でやってきた指導者が多い。これを市の方で何とかできないかと思っている。ほかの学区では、帰宅後、ゲームやスマホで遊んでいる子どもが多い。まったく運動をしないので、昨年、愛知県は全国の運動能力検定で最下位だった。豊田市単独のデータはわからないが、非常に子ども達の体力が落ちている。10歳から12歳の間に神経系の機能が完成すると言われている。中学校では肺活量や筋力が高まってくるが、そういった時間が取れないことで非常に将来が心配である。今の高齢者たちが運動ではなくても手芸みたいなものでもやっている人を組織に入れて、ジャンルを広げて高齢者にも役に立つ形で、子ども達の体力、趣味、教養を伸ばすとか、こうしたことを全市的にできると、子ども達にとっても良いと思っている。

市長：具体的なアイデアありがとうございます。今の話は持ち帰ってどのくらいのことができるのか、できないのか議論する。3か月くらい前、中京大学に行った際、教員志望の学生から提案が出た。部活動の地域指導があるから、ぜひ指導員に雇ってくれな

いかと。その仕組みが学校の組織に落とし込めれば人が代わってもやれるのではと思い、それは面白いねと言って持ち帰って教育委員会に話をしたら、もうやっているということだった。なかなか情報が伝わっていないと感じた。例えばこちらでも、中京大学に指導者を送り込んでもらうことはあると思う。土橋小学校は現場を視察したが、土橋のやり方は学生に頼んで指導に来てもらって、わくわく事業補助金を使っている。9割補助なので、残りの1割は自己負担している。いろいろなやり方があると思う。指導側でやりたいという人も結構いて、仰られたようにスポーツに限らず、文化的なことであればいくらかでも対応できるのではないかと思う。茶道や華道の団体と話をした際、若者が来ないという課題に対して、中学校の部活の地域移行に伴って、交流館などで中学生に指導する場を設けてファンを増やせばいいのではと言うのだが、その一歩を踏み出せない。一方、面白いと思っているのは、旭地区では、地域で計画を作ったり、何か決める際には地域のこどもを呼んで意見を聞くそうです。ある時、中学生が意見を求められて、「いつも意見を求められるが、一つも実現していないではないか」と反発された。大人が慌てふためいて、支所が動き、わくわく事業の一部を中学生枠にした。総合学習などの時間を使って、地域の課題に対してこども達がアイデアを出しあって、わくわく事業のお金で実現している。よく他の地域会議で申し上げるのは、地域会議委員は市長が任命しているが、例えば皆さんがこども地域会議を作って、地域のこども達をこども地域会議委員として任命して、地域のことを考えて提案してもらう。それに対して必要ならわくわく事業でも支所の予算でも使うのは全然構わない。地域にとって良いものであれば、こどもでも大人でも関係なくそれを実現するのに税金を使うことは全く問題ない。各種意見の4番目について、地域事業に若者や小中学生などの参加が少ないというのであれば、具体的な提案として直接中学校に話をし、わくわく事業の予算の一部を提供してしまう。中学校もお金がないので喜ぶと思う。因みに、旭地区の一つの事例は、中学生が総合学習の中で地域の課題を勉強して、獣害の被害が大変だということを知り、獣害の被害に協力したいという思いで、猪の肉を使ったジビエのハンバーガーはどうでしょうと、ポンチ絵まで描いてこども達が提案を行った。地元の飲食店がタイアップして、中京テレビも絡んで、イベント等の宣伝をしてくれた。そうするといろいろなイベント会場から誘いがくるようになり、こども達も生き生きして、大人もこども達に対して約束が果たせた。獣害に対してそれほどの効果があるわけではないが、地域で課題が共有されて、その物語はテレビを通して全国で放送され、それを観ているいろいろな人たちが感じてくれたということは、非常にインパクトが大きかった。こどものアイデアを活かす手立てはいくらでもあると思う。それから今回の中学校の部活の地域移行は、昭和の時代には、こどもは家庭でしつけて、学校で学び、地域で巣立つという三位一体が連携して初めてこどもが育つと言われてきた。いつの間にか学びは学校、育つのも学校、家庭も距離を置いて、地域社会も距離を置いて、ひたすら学校が抱え込んだ結果、働き方改革が必要と言われるようになった。根底にあるのは、家庭も地域社会もこどもと距離を置いてしまったからと考えている。部活の地域移行は、地域でこどもが育つことに拘る

最初で最後の機会とも思う。そうであれば、井郷地域でこどもがすくすくと健全に自分らしく育っていくために、地域社会はどうあるべきかという視点で解きほぐしていくと、いろいろなアプローチが考えられる。こども会議やわくわく事業でお金を使わせてみる、あるいはボランティアのバザーで得たお金の一部をこども達に還元し、使い方を考えさせる。さらにその収益金をこども達が地域のために使う知恵と工夫を出して、いい方向に回っていくような仕組みを取り入れるなどが考えられる。棒の手保存会は、まさにそういう循環の中にある。こどもが地域の中で主役になれる。こどもを大人が喝采して応援する。まさに、こどもを地域で育てる典型である。地域が温かく見守るそういった地域社会を実現できれば、部活の地域移行を通して実現できれば本当に良い方向にいくのではと期待している。

委員：自分はいさとスポーツクラブからここに来ている。部活の地域移行で、中京大の学生が土橋で指導している話があったが、実際のところ学生はあまりあてにはできない。単発でしか来てもらえないことが多く、定期的に講習を開こうとしても対応できないのが現状である。学生は是非にと言うが、勉学の都合もあり来てもらえない。土橋がどんな風にやっているのか情報を得ながら、指導者が見つからないことや、費用的な問題にも対応していく必要がある。それが今のいさとスポーツクラブでの現状である。

豊田市は、トヨタ自動車の成長に伴って、第1次産業従事者がどんどん減ってきて、第2次、第3次の比率が増えてきた。ここから北側の中山間地は荒れている所が多いと感じる。獣害があまり話題にならない頃は、小さな農地でもきちんと耕作されて、きれいな状態が保たれていた。旭地区では圃場の整備をして、大きなところでは法人を作っているが、一步離れれば耕作放棄地が増えている。第1次産業従事者が今後も減っていく中で、猿投でも桃や梨の生産にかつて程の勢いが無い。南の方でも大きな物流施設が建って、いい圃場が倉庫になってしまっている。第1次産業の今後について、そんな心配をしている。

市長：前段の部分では少し誤解があるようで、土橋は学生が中京大生かどうかはわからないが、その学生と運営している人たちの信頼関係が構築されている。あの人が良いのだとベタ褒めだったので、そういった人間関係ができた人を確保していると思ったほうがいい。私もそんな簡単だとは思っていない。学生も忙しいのである程度ローテーションを組んでやらないとうまくいかない。個別の学生では成り立たないので、例えばどこかのゼミの活動の一環の中で位置づけてもらわないとうまくいかないと思う。

農業については仰るとおりで、そもそもの人口が減っている中で農業の担い手が減っていくのはどうにもならない部分もある。その中で旭地区の自給家族はご存じでしょうか。チームを組んでミネアサヒを生産するのに、それを買う人から予めお金を集めて商品を後で渡す。聞くとところによると万が一不作の場合でも、お米は渡せませんがお金は返せませんという関係性ができている。単に米を買うということではなく、別の価値を感じている人たちがいる。名古屋方面の人たちにすると田舎のおじいちゃんやおばあちゃんと話をする、一緒に作業することが楽しい。だからそういう関係になる。単に米が欲しいだけならもっと安い米を買う。そのあたりをどう判断するかということがある。

本当に山の農業や農家を心配するなら、意図的に買い支える必要がある。日本全国これを繰り返してきていて、地元の農家が下火になって農地が荒れて、猪や熊が住宅地に来る。結局、地元の物を多少高くても買い支えるという風になることで、自分たちの子や孫の世代が住みやすくなる。全体の2割か3割くらいの消費活動が、そうやって地元の支えになってくるといいと思う。

ふるさと納税を皆さんも気軽にやっていると思うが、豊田市は12、3億円の赤字となっており、全国で悪い方から50位くらいになっている。東日本大震災や熊本の災害時に応援する意味でふるさと納税するのはわかるが、ただの返礼品目当てというのは仕組みとしてどうにかならないものかと感じている。

市長：井郷地区は、豊田市の中でも群を抜いて非常に住みやすく、住みよさ満足度も非常に高い。四郷が開発されて、まち側と山側の間の中にあり、井郷中学校ではいいところ取りだと話したことがある。ベースが恵まれている分、様々なチャレンジができる地域だと思う。財源が必要であれば、わくわく事業補助金の活用や、支所の権限強化により、大抵の地域課題は筋さえ良ければやれるので、支所にご相談いただきたい。恵まれた井郷だからこそチャレンジして、オール豊田の先進例として他の地域に情報発信していただくとありがたい。

#### 4 提言に対する市の回答

- ・ 8月23日に市長に対して行った提言に対する市の回答について説明（資料4頁）  
事業所管課は猿投支所と交通安全防犯課  
一番危険と思われる四郷小から猿投駅に抜ける道で、井上橋に「ぴかっとわたる君」が先月8日に設置された。
- ・ 令和6年度の地域課題解決事業の内容について事務局から説明（資料5頁）  
ゾーン30の啓発チラシ、高齢者クラブの協力により講習会、ペースカー  
危険な箇所の調査を実施予定  
→質疑等なし

#### 5 わくわく事業現場訪問

- ・ 「下古屋の環境を守る会」、「井上公園を美化する会」、「とよた子育てサークルネットワークの会「コネット」」、「ふるさと井上・未来座」、「御船地区三河線廃線愛護会」、「井郷地区自主防災会」、「四郷駅C I C」の7団体の活動について、訪問した委員から報告（資料7～13頁）  
→質疑等なし

#### 5 情報共有・事務連絡

- ・ 11月16日の運動公園ラグビー場北側T字交差点での死亡事故発生について情報共有（高町自治区） ※交通安全防犯課に情報提供済み  
→猿投支所で高齢者クラブ連合会の会員全員にタックルバンドの配付を予定
- ・ 令和6年度の地域会議委員継続意向を推薦団体及び事務局に連絡するよう依頼

(次回の予定)

日時：令和6年3月13日（水） 午後7時から

場所：猿投コミュニティセンター2階 大会議室

※1月及び2月の会議は中止